

周知のように『思惟略要法』には四無量觀法、不淨觀法、白骨觀法、觀仏三昧、生身觀法、法身觀法、十方諸仏觀法、觀無量壽仏法、諸法実相觀法、法華觀法を説いている。私はこれら諸種の觀法中、觀無量壽仏法に問題を見出したと思う。

これら觀法のなか、觀仏三昧以下觀無量壽仏法にいたる五觀は念仏觀を説くものであり、この五觀のなか觀無量壽仏法を除いた前四觀は、四無量觀法以下の三觀とともに劉宋の曇摩蜜多訳にかかると『五門禪經要用法』

からの抄出したものである。然るに同じ念仏觀である觀無量壽仏法は、曇摩蜜多訳の『禪秘要法經』卷上の第二觀白骨白光涌出三昧や第十一白骨流觀、同下巻の白骨觀と関連をもつものである。

かかる他經典との関連があきらかな觀無量壽仏法は、白骨觀の成果として「顔容巍巍として紫金山のごとし」と表現さ

れる無量壽仏を觀見するのである。この点「觀無量壽經」の定散二善を通じて説かれる無量壽仏とは、別なアスペクトにおいてこの仏をとらえるものである。即ちこのとらえ方は『禪秘要法經』上巻に、「この（白骨流光）觀を得る時、当に自然に白光のなかにおいて一丈六の仏を見るべし」——第二觀——（ここでは具体的に

### 『思惟略要法』の觀無量壽仏法

藤 堂 恭 俊  
(助教授)

仏の名称をあげていないが、下巻の白骨觀が兜率往生を説いていることから、この仏を釈迦牟尼仏、弥勒仏——というような世代的系列につらなる仏であろうと推定しうる——といっているのとらえ方と同じであり、ただ世代的系列につらなる仏に代る仏として無量壽仏を登場せしめたまでのことである。かかる觀法の対象像の

置きかえがなされる背後に、世代的系列につらなる仏への信仰に対抗しようとする無量壽仏の信仰運動が予想されねばならない。

さらに『思惟略要法』の示す觀仏三昧以下の五觀は、念仏觀である点から除罪法である。しかるに白骨觀は不淨觀に附順するものとして除貪欲法であるが、『禪秘要法經』にあつては「白光涌出三昧門を説くは、乱心を撰して生死の海を渡らしめんがためなり」（上巻第二觀）と言ひ、これを除乱心法として

いる。この除乱心法は『思惟略要法』の原本とみなされる『五門禪經要用法』において、「乱心多きものに教える安般をもつてす」といつているように数息觀となしている。かかる点から觀無量壽仏法は念仏觀としての除罪法というよりも除乱心法という性格が強いわけである。このことを肯定するならば觀無量壽法は数息觀を代行するものと言ひ得ようか。